

期末レポート作成・提出について

1. レポート内容

テーマ：「講義内容に関連するテーマを各自の関心に即して自由に設定し、それについて論じてください。」

たとえば、

- * 講義内容や参考文献・資料、BBS での意見交換を通じて興味・関心をもったトピック、触発されたアイデア
- * 10 月レポート「働くこと、会社、職場などに対するあなた自身の疑問」のバージョン・アップ版（自分が立てた問い・疑問に対するリサーチと考察・分析・解明）
- * 講義で紹介した文献を 1 冊取り上げて読書レポート（内容要約 4 割 + リサーチ・考察 6 割）

分量： 3,000 字以上（図表は 400 字にカウント）

提出期限： 定期試験日 試験教室にて提出

（定期試験時間割発表時に、日時・教場を確認のこと）

【評価基準】

授業内外で吸収した知識をもとに、自らの思考を駆使して社会科学的に考え抜いた痕跡がどれだけ反映されているかの点を評価基準とします（たんなる 感想文 や、文献・Web からの引用の継ぎはぎ では低い評価となります）。

×「出しさえすれば単位はもらえる」

※ 事後提出は認めません（やむを得ない事情により試験日当日に出席できない場合は事前に連絡を！）

※ レポート提出がなされない限り、当該配点は 0 点となります

※ 学内内規により、総得点が 59 点以下の場合、成績は「不可」となります

【成績評価の配点】

第 1 回（9/24）の授業レジュメで確認しておいてください

出席状況（配点 30 %）

授業参加の積極度（配点 30 %）

BBS への投稿回数・内容、授業中の発言や質問、ディスカッションへの積極的参加、提出物の提出状況などにもとづいて、授業参加の積極度を総合的に評価します。

期末レポート（配点 40 %）

2. ヒント・助言

【参考文献】レポートの書き方

河野哲也、2002、『レポート・論文の書き方入門 第3版』慶應義塾大学出版会
戸田山和久、2012、『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』NHK ブックス
石黒圭、2012、『この1冊できちんと書ける！ 論文・レポートの基本』日本実業出版社
山内志朗、2001、『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書
西研・森下育彦、1997、『「考える」ための小論文』ちくま新書
樋口裕一、2002、『やさしい文章術 レポート・論文の書き方』中公新書ラクレ

受講者からの質問

「どんなことを書けばいいのかわからない」「書くことがなくて3,000字が埋まらない」

「レポートを完成させるにあたって、どのような事を決定して、どのような本を読めばよいのでしょうか。」

→A：自分で設定したテーマ（問い）について、（文献を探す・読むをヒントに）論じる

→B：概念（文献を読んで学習したこと）をまとめる＋それを使って分析 or その概念理解に対する批判的検討（「まとめ」だけであれば最低点）

「誰かの説や文献、資料からの引用が必要なのでしょうか。それとも、私の考えた論理を述べればいいのでしょうか。」

「自分の考えだけですすめていいんですか？ 自分が正しいと思って論じてるならオッケーなんですか？」

→妥当性（根拠）と説得力

* 「書くことによって、考える、理解する」是非このことを体験してください。

3. 注意事項

- ・ 剽窃（盗作）のないように →引用には必ず引用表記をつける
- ・ 丸写しのないように →自分の言葉でまとめ直す（長文引用の場合は引用表記を）

どこからどこまでが文献の引用で、どこからどこまでが自分の論証なのかが判読できること

巻末に「文献・資料リスト」を作成する

本文で言及した文献・資料・Web サイトは、すべて巻末のリストに載せる（モレのないように）

① 書籍・新聞雑誌記事などの場合

編著者名、刊行年（西暦）『タイトル名』発行者

タイトル名：単行本は『 』、雑誌・パンフレット類は「 」
例)

井上茂美、1994、『萌えるまち』講談社

都市ネットワーク研究会編、2004、『多摩田園都市 ——ニュータウンの軌跡』中央公論新社

「朝日新聞」2005 年 5 月 15 日朝刊

② 論文の場合

著者名、刊行年、「論文タイトル」『掲載雑誌名』雑誌巻号数、掲載ページ

例)

坂田富子、2001、「親密性の変容 ——こどもの遊びを事例に」『現代社会研究』Vol. 35, pp. 28-41

③ Web 情報の場合

ページ作者名「ホームページのタイトル」（URL, アクセス年月日）

例)

川越市「川越市ホームページ」（<http://www.~.jp>, 2005 年 6 月 3 日）

安藤広重「ゴフマン研究の広場 ホームページ」（<http://www.~.jp>, 2005 年 6 月 15 日）

編著者名、刊行年、タイトル名、発行者名などの情報は「奥書」（本の裏表紙）で確認する
書籍の「奥書」欄（裏表紙見返し）

MINERVA TEXT LIBRARY®

社会調査へのアプローチ 第2版

——論理と方法——

1999年11月20日 初版第1刷発行
2003年9月30日 初版第13刷発行
2005年2月20日 第2版第1刷発行

検印廃止

定価はカバーに
表示しています

編著者	大谷 信介 後藤 範幸 永野 武	木下 栄二 小松 洋
発行者	杉 田 啓 三	
印刷者	坂 本 嘉 廣	

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房

607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話代表(075)581-5191 番
振替口座01020-0-8076 番

©大谷, 木下, 後藤, 小松, 永野, 2005 内外印刷・清水製本

ISBN 4-623-04104-2

Printed in Japan

↓

大谷信介ほか編、2005、『社会調査へのアプローチ 第2版』ミネルヴァ書房

文献リストは編著者名・作者名により、アルファベット順、またはアイウエオ順に並べる

本文中での引用箇所には、すべて引用表記をつける

引用箇所の直後、句読点（「、」「。」「」）の前に、

（編著者名 刊行年: 引用頁）

例)

…インタビューは…という調査法であるといわれている（大谷ほか編 2005: 89-92）。

…34.5%の児童がテレビゲームのソフトを20本以上所有しているという（坂田 2001: 32）。

…これについて、「当時は…であった」と記されている（井上 1994: 57-58）。

…これについて井上氏は次のように記している。「当時は…であった。」（井上 1994: 57-58）

以上